多摩六都科学館　第2次基本計画

平成26年度～平成35年度

（2014年度～2023年度）

平成26年1月

多摩六都科学館組合

目次

1. 基本計画策定にあたって

（1）基本計画策定の背景と趣旨 1

（2）基本計画の策定方針 2

（3）新たなステージに向かって　ー多摩六都科学館が次にめざす方向性ー 3

2. 多摩六都科学館の使命 4

3. 第2次基本計画の事業目標 5

4. 事業別基本計画 6

5. 事業評価の進め方 9

註 10

参考資料

（1）多摩六都科学館基本計画策定の経緯 11

（2）多摩六都科学館基本計画策定委員会　委員名簿 11

（3）多摩六都科学館基本計画策定委員会設置要綱 12

（4）市民調査結果 13

（5）多摩六都科学館SWOT分析結果 24

1. 基本計画策定にあたって

（1）基本計画策定の背景と趣旨

■多摩六都科学館基本計画とは

多摩六都科学館は、多摩六都圏域の５市（小平市、東村山市、清瀬市、東久留米市、西東京市）が共同で設置し、運営する地域のための科学館です。

多摩六都科学館基本計画は、多摩六都圏域における科学館の使命を明確にし、管理運営の基本方針と事業の体系を表す中長期計画で、科学館運営の指針として位置づけられるものです。

基本計画の計画期間は10年間で、平成16年度に現行の基本計画（以下「第１次基本計画」という。）が策定されて、平成25年度に最終年次を迎えました。今回策定する新たな計画（以下「第２次基本計画」という。）は、平成26年度から平成35年度の10年間が計画期間となります。

■第2次基本計画策定の経緯

平成25年度に、多摩六都科学館基本計画策定委員会（委員長：縣 秀彦 国立天文台准教授　参考資料11頁～12頁）を設置して、第１次基本計画の検証と現状分析から課題を抽出し、使命・目標の見直しや、評価制度と連動した計画の検討に取り組みました。

また、平成24年度から、多摩六都科学館組合（以下「組合」という。）の直営を改め、指定管理者制度が導入されたことに伴い、新たな管理運営体制を前提としたスキームに改定する必要があります。

■第2次基本計画と関連計画との位置づけ

計画の策定に当たっては、第１次基本計画の基本理念を踏襲します。

また、東京都や圏域５市の状況等を踏まえ、「地域の生涯学習の拠点構築」「利用者の体験学習の更なる充実」「運営の効率化の推進」「少子・高齢社会への対応」「アクセスの向上」「学校教育との連携」等を検討課題とします。

多摩六都圏域の上位計画となる「多摩六都広域連携プラン」（平成23年３月多摩北部都市広域行政圏協議会）で示された「緑と生活の共存圏」「だれもが生き生きと健やかに暮らせる地域の創造」の実現をめざして、当科学館の役割をより明確にしていきます。

■取組姿勢

開館から20年が経過し、さまざまな試行錯誤を経て、中核事業であるプラネタリウムと展示の更新により、新たな学習価値を生み出す体制が整いました。社会状況や地域の課題を見据えた上で、多摩六都科学館の役割や活動理念を明確に打ち立て、これからの10年も果敢に挑戦し続ける科学館であるために、第2次基本計画を策定します。

「ともにつくりあげる」「価値を共創できる」基本計画を策定するために、利用者だけでなく、圏域市民の利用状況や求められている科学館像を把握することを目的に、多様な市民調査を行いました（参考資料13頁～23頁）。

また、基本計画策定委員会、組合、科学館の現場スタッフ、ボランティアが一堂に会し、ワークショップ形式で基本計画の検討を進めていくことを取組方針としました。さらに策定後も、市民や関係者とともに創造的な試行錯誤をしつつ、節目で計画の見直しをしながら進めていける柔軟で実効性の高い計画とします。

（2）基本計画の策定方針

第１次基本計画では、使命を定めた上で個別計画を策定し事業を進めてきましたが、 より実効性のある計画とするためには、以下の取組みが必要となります。

❶基本計画と事業評価を明確にリンクさせます

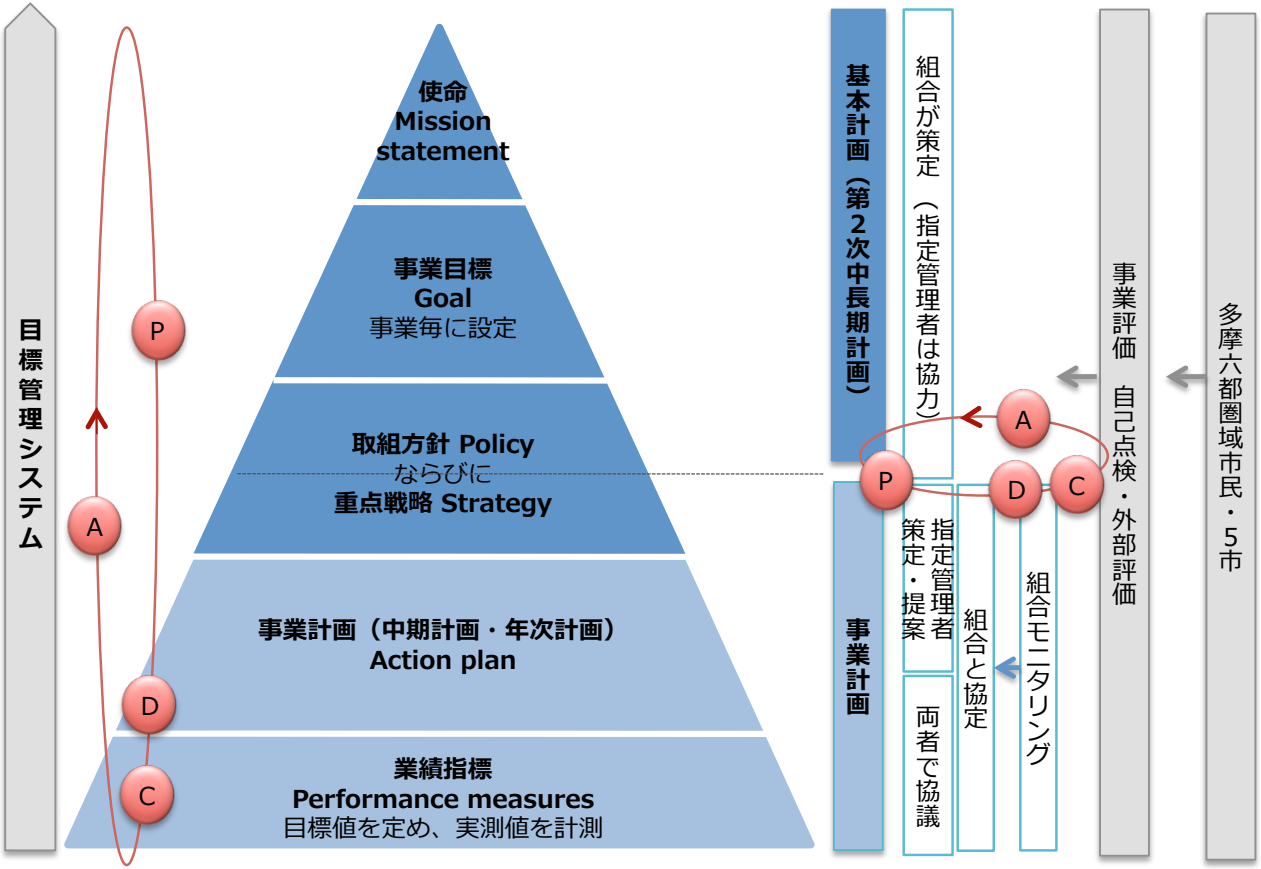
❷全体の目標管理システムを構築します

❸中長期の観点から目標値を定め、経年変化を分析可能にします

❹指定管理者制度の導入を踏まえて、組合と指定管理者の役割分担を明確にします

第2次基本計画は、公的施設が目標管理・実績評価を導入しやすい「戦略計画方式」で策定します

- 第2次基本計画は、使命・事業目標・取組方針ならびに重点戦略までとし、今後10年間の上位計画と位置づけます
- 事業計画は指定管理者が策定し、組合と協定を締結。業績指標は、組合と指定管理者と協議の上定めます
- 外部環境・内部環境の変化に応じて、毎年、戦略内容等の調整を行い、柔軟かつ弾力的に基本計画の運用を図り、持続可能な科学館運営を行うことを基本方針とします



＊PDCAサイクル：事業活動を円滑に進めていくため、Plan（計画）→ Do（実行）→ Check（評価）→ Action（改善）を繰り返し行っていくマネジメントサイクル

（3）新たなステージに向かって　ー多摩六都科学館が次にめざす方向性ー

多摩六都科学館は、楽しく科学に触れられる科学館として親しまれ、多くの方々から支持される科学館へと成長してきました。開館してから20年の間には、急激な利用者減や設置者の財政難など多くの課題に直面してきましたが、施設更新と運営の改革に果敢に挑み、克服してきました。その源には、平成14年度にまとめられた運営の基本理念が脈々と生きており、この理念は今後も多摩六都科学館の中核事業である科学館事業の根幹をなすものです。

開館20年の節目を迎えた今、次にめざすのは、市民が主役となって、多摩六都圏域の市民や資源をつなぎ、身近な地域の価値に目を向け、多様な学びの場を創造することです。このために、多摩六都科学館は、ライフサイクルの成熟期を迎えた施設としてマーケティング戦略の大幅な見直しを図り、「市民と価値を共創できる場」をめざし、地域拠点事業にも取り組む新たなステージに挑みます。

Phase　1	Phase　2	Phase　3
平成6年3月開館～平成15年度	平成16年度～平成25年度　第1次基本計画	平成26年度～平成35年度　第2次基本計画
導入期	成長期	成熟期
科学館事業（中核事業）		
広域行政圏の拠点的施設としてスタート ●平成2年1月「（仮称）子供科学博物館基本構想書」 **生涯学習・文化の振興が主目的** ●設置目的：「多摩六都科学館は、次代を担う子どもたちの夢を育み、科学する心を養うとともに、各世代にわたって生涯学習の推進を図り、文化の振興に寄与するために設置する。」 **開館時のうれしい悲鳴** ●平成６年（1994年）３月１日　多摩六都科学館開館 ●売り物のプラネタリウムは、世界一の大きさのドームと最新式の投影機・７０ミリ全天周映像による番組構成 ●3月だけで3万人が来館、平成6年度16万８千人の利用者 ●北多摩の目玉となる施設となる **急激な利用者減** ●次年度は12万５千人、以降急激に落ち込んで、５年目には10万人を切る瀬戸際に ●スタッフの努力がなかなか評価や成果に結びつかない時期 **7年度目の改革** ●もう一度来てみたくなる科学館をめざし、常設展示を入れ替え、プラネタリウムのオリジナル番組を開発。ボランティア制度にも取り組む ●リピーターの獲得、市民参画のしくみづくりが功を奏し、７年目以降は徐々に利用者も増加	**基本計画や財政計画を策定** ●いち早く事業評価制度を取り入れて運営改善を実施 ●専門性と運営の効率性を同時に高めていくことをめざす ●**基本理念（今後も継承される科学館事業の理念）** **①科学と人間の調和を目指す** **②文化としての科学を追求する** **③専門性とエンジョイメントの両立をはかる** **④地域コミュニティーの生涯学習拠点とする** **⑤徹底した利用者中心を追求する** **組合組織市の財政難・ハードの更新時期** ●事業経費が大幅に削減され、更なる変革を推進 ●開館から15年が経過し、プラネタリウム機器を更新する必要が高まる ●常設展示の在り方の検討をはじめる **ソフト・ハードの大転換** ●管理運営者を直営から指定管理者にするプランと併せて運営形態の大改革を果たす ●平成24年に導入した新しいプラネタリウムの「ケイロンⅡ」は、最新の技術の粋を集め、「最も先進的なプラネタリウム」として世界一に認定され内外の注目を集める ●常設展示は、「ラボ」を起点とするコミュニケーションの場に舵を切り、リニューアル事業は大きな成果をあげた	**科学館の役割が変わりつつある** ●東日本大震災や原子力発電所の事故を経験し、科学や科学技術とどう向き合っていくかが問われる今、科学館の役割が変わりつつある ●専門家と市民の橋渡しをするだけでは済まなくなり、市民が生活者として科学や先端技術を考えていく力（科学リテラシー）を育む場が求められている **多摩六都科学館が次にめざすこと** ●多摩六都圏域の人々や資源をつなぎ、身近な地域の価値に目を向け、多様な学びの場を創造すること ●地域への誇りと愛着を生み出す体験の場をつくりだすこと ●価値・ソフト・コンテンツ・ひと・地域を、市民とともにつくりあげていく場となること ●従来の科学学習の枠を超えて、コミュニティー型の学習ができる新しい科学館となること ●地域の市民が主役になれる場をめざすこと **今後も成長発展するためにマーケティング戦略の転換のとき** ●ライフサイクルの成熟期を迎えた施設として、マーケティング戦略の大幅な見直しを図る時期に来ている。ターゲットの拡大などは必須 ●これまでのミュージアムの発想では明確でなかったカスタマー・エクスペリエンスの向上の徹底こそ次なるミッション。事業拡張は必須
		地域拠点事業

2. 多摩六都科学館の使命

多摩六都科学館の使命
Mission statement
めざすべき方向性・社会的な役割

多摩六都科学館は、地域の皆さんをはじめとする様々な方々とともに、

誰もが科学を楽しみ、自分たちの世界をもっと知りたいと思える多様な「学びの場」をつくりあげていきます。

そして、多摩六都科学館は、活動の幅を拡げ、皆さんをつなぎ、「地域づくり」に貢献することをめざします。

多摩六都科学館は、多摩六都（小平市・東村山市・清瀬市・東久留米市・西東京市）の５市が運営する科学館です。

多摩六都科学館の役割

「多摩六都広域連携プラン」における政策的な役割

（期待されている中期的な成果）

- 広域の文化交流による多摩六都の文化醸成
- 総合的な学習活動の支援
- 地域連携の促進
- 多摩六都の地域資源の普及促進
- 多摩六都の魅力を内外にアピール

多様な「学びの場」の創出

（直接的な成果）

- 遊びながら楽しく科学を学べる場
- 科学的な観点から身の回りの世界をひもとき、多様なものの見方に気づき、新たな発見や疑問を見いだす場
- 生きる力となる創造的な考え方や体験が得られる場
- 科学と向き合い、科学が抱える課題を自分の問題として考えることができる科学リテラシーを育む場
- 多摩地域の価値や資源を再発見・再評価する場

「地域づくり」に貢献

（長期的・間接的な成果）

- 次世代の人材育成・人づくり
- 地域の活性化・地域や市民を元気に
- 地域産業や科学技術のイノベーション
- 多摩六都や多摩地域の価値創造
- 市民の地域に対する愛着を育み、高める
- 地域住民の幸福度や自己実現度を高める　等

KPI／重点的な業績指標

利用状況・経営状況の業績指標

- 利用者数：リニューアル後の最高値18万人をキープ
- 利用料金収入：最低9千万円を目標とする

＊経営指標に関しては、計画施行後、検討し設定

直接的な事業効果を測る業績指標

- 利用者・参加者の満足度
- 科学への興味・関心の喚起度
- 「誰もが科学を楽しめる科学館」としての評価
- 科学館での体験を通して、考え方や生き方に変化が生まれたと答えた人の割合
- 多摩地域の価値を発見したと答えた人の割合

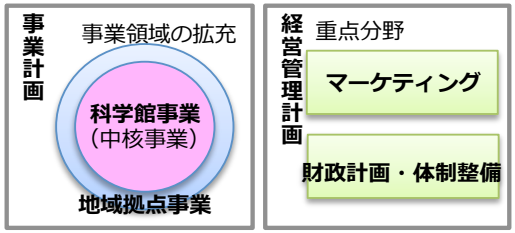
長期的な成果を測る業績指標

- 「多摩六都科学館の10年間の活動は、自分にとって、あるいは地域にとって価値あるものだったと思いますか」で「はい」と答えた人の割合
- 「多くの圏域市民が参加し盛り上げていける科学館」としての評価
- 「地域の振興に寄与できる科学館」としての評価
- 科学の担い手の育成
- 圏域市民の科学リテラシーの向上

3. 第2次基本計画の事業目標

多摩六都科学館は、使命を達成するために、第２次基本計画では、次のことに取り組みます。

- これまでの科学館事業を中核に置きつつ、「地域づくり」への貢献をめざし、地域拠点事業に積極的に取り組みます。
- 地域拠点事業をマーケティングと結びつけ、これまでのミュージアムの発想では明確でなかったカスタマー・エクスペリエンス（経験・体験を通しての顧客の価値創造）の向上を徹底させます。
- 多摩六都科学館は、下記目標のもと、今後の活動を展開していきます。



多摩六都科学館の事業目標　-活動理念と5つの事業目標-

Goal　これから10年の大きな目標

多摩六都科学館の活動理念

館全体の包括的・長期的事業目標

科学でつながる

ともにつくりあげる

多摩六都科学館

科学館の運営にかかわるみんなが共有する活動指針となるものです

科学館事業（中核事業）

事業目標1
科学を楽しみ世界と向き合う

多摩六都科学館は、これまでの科学館事業を継承しつつ、さらに活動や場を拡げ、ひとりでも多くの皆さんが科学の楽しさをともに体験でき、科学リテラシーを高められる科学館をめざします。

マーケティング

事業目標4
愛着の持てるロクト*4へ

多摩六都科学館は、圏域市民の認知度・利用度を高め、利用者の満足度向上をめざします。さらに、市民から愛着を持って「自分の科学館／地域の科学館」と認められる存在となります。

地域拠点事業

事業目標2
多摩六都の交流拠点

多摩六都科学館は、地域の人々が世代を超えて交流し、自己実現の場として活用できるよう、地域の交流拠点（たまり場*1・ハブ*2）となります。

事業目標3
多摩六都の魅力発信

多摩六都科学館は、活動や場を介して、地域の様々な資源*3をつなぎ、新たな資源を市民の皆さんとともに作り上げ、社会に還元していく創造拠点となります。

財政計画・体制整備

事業目標5
持続可能なしくみづくりを

多摩六都科学館は、ソフト・ハード両面の改善が推進できる健全な財政計画や協働体制を立案実行し、地域貢献できる施設として持続可能な発展をめざします。

4. 事業別基本計画

多摩六都科学館基本計画は、下記方針で運用を行っていきます。

事業目標　Goal	取組方針　Policy	重点戦略　Strategy	業績指標（案）　Performance measures
これから10年の事業毎の大きな目標。使命を具現化するものとして、基本変更はせずに取り組みます。	これから10年の事業毎の取組方針。基本変更はせずに取り組みますが、進捗状況や外部環境・内部環境の変化によっては組合と指定管理者間で協議の上、適切に見直しを図っていきます。	これから10年の重点戦略。重要度●レベル1（必須）項目は、事業の根幹をなすものなので基本変更はせずに取り組みます。●レベル2（次なる取組）項目ならびに●レベル3（長期的な取組）項目は、組合と指定管理者間で協議の上、年間事業計画の中で定めていきます。また、組合・指定管理者のどちらが主体となって取り組むのかも協議の上、決定していきます。	これから10年の業績指標。●重点指標は、事業の根幹をなすものなので、基本変更はせずに長期的に目標値を定め、実測していきます。●指標候補は、組合と指定管理者間で協議の上、年間事業計画の中で定めていきます。■長期的な成果指標は、市民調査を行い、3～5年毎に定点測定します。

多摩六都科学館は、使命ならびに各事業目標を達成するために、各事業に取り組みます。業績指標は、各年度の事業計画で適切に定めていくこととします。

		事業目標　Goal	取組方針　Policy	重点戦略　Strategy	業績指標（案）　Performance measures
事業計画	科学館事業（中核事業）	事業目標1 **科学を楽しみ 世界と向き合う** **多摩六都科学館は、これまでの科学館事業を継承しつつ、さらに活動や場を拡げ、ひとりでも多くの皆さんが科学の楽しさをともに体験でき、科学リテラシーを高められる科学館をめざします。**	多摩六都科学館の中核事業です。「科学を楽しみながら学べる科学館」「子どもたちの科学する心を育む科学館」像はこれまで通り大切にしつつ、幅広い年齢層も利用できる施設へと徐々に領域を拡げます。多くの方々が科学の楽しさに触れ、新たな価値を発見できる科学館像の実現をめざします。	●専門性を基本とした上で、科学を通して得られる楽しみや感動、インスピレーションを重視した事業を行います。 ●子どもを中核としつつ、より幅広い年齢層（幼児、若者層、高齢者層）が共に楽しめるコンテンツの開発を推進します。 ●展示や教育普及活動がさらに充実するよう、科学館事業の基盤となる収集・保存・調査研究活動の強化を図ります。 ●館内だけでなく、地域全体にも活動フィールドを拡げ、多くの方々が科学の楽しさを体験できるよう、アウトリーチ活動を推進します。 ●圏域内にサテライト（科学教育の場）が拡がっていくことも将来展望とします。 ●多様なテーマを科学的なアプローチで探求し、科学に興味のない方でも来てみたいと思わせる事業展開を図ります。敷居を低くし、科学への興味を引き出す場をつくりだします。 ●ひとりで展示を見るだけではなく、その場に参加した人たちで、ともにつくりあげていくプログラムへと転換を図ります。	●科学の楽しさを実感したと回答した人の割合 ●科学への興味・関心の喚起度 ●幅広い年齢層からの支援（年代別利用者数） ●年齢別のコンテンツ開発数 ●ともにつくりあげていくプログラム開発数 ●新規利用者数 ●アウトリーチ活動の実施回数・利用者数・貸出件数 ●調査研究活動数 ●研究成果の市民への還元数 ■「誰もが科学を楽しめる科学館」としての評価 ■「科学の担い手」の育成 ■市民の科学リテラシーの向上

凡例　重要度　●：レベル1（必須）　●:レベル2　●：レベル3

凡例　●：重点指標　●：指標候補　■：長期的な成果指標

		事業目標　Goal	取組方針　Policy	重点戦略　Strategy	業績指標（案）　Performance measures
事業計画	地域拠点事業	事業目標2 **多摩六都の交流拠点** **多摩六都科学館は、地域の人々が世代を超えて交流し、自己実現の場として活用できるよう、地域の交流拠点（たまり場・ハブ）となります。**	開館当初から期待されていた役割でありながら、「子どもの施設」のイメージが強く、生涯学習施設としての機能や魅力は周知されていません。 そこで、施設の機能構成から見直し、圏域市民が気軽に利用できる施設へと転換を図ります。	●地域の人々が立場を変えつつも人生を通して、科学館ボランティアや友の会等の自主的な活動によって成長し、社会貢献し、自己実現できるよう支援活動を行います。 ●市民や利用者の総合的な学習活動を支援するため、市民の視点に立ち、利用者が主役となって活用できる場をともにつくりあげます。 ●科学館をもっと気軽に利用してもらえるよう、無料ゾーン・有料ゾーンの設定を変更し、無料ゾーンの充実を図ります。 ●圏域市民のための施設として認知されるよう、施設の貸出しや場の提供に向けた条例の改正や規程の整備を行います。	●ボランティア活動の状況（参加人数と活動度、活動内容） ●市民参画型事業数 ●学習支援施設（ライブラリー等）の利用数 ●施設の貸出件数と活動内容 ■生涯学習施設としての評価 ■地域の交流拠点としての評価 ■「多くの圏域市民が参加し盛り上げていける科学館」の評価
		事業目標3 **多摩六都の魅力発信** **多摩六都科学館は、活動や場を介して、地域の様々な資源をつなぎ、新たな資源を市民の皆さんとともに作り上げ、社会に還元していく創造拠点となります。**	新たに定めた使命を実現するために、新たに設けた事業分野です。 徐々に地域連携や地域資源の掘り起こしは始めていますが、今後は多摩六都科学館の目玉となる事業となります。 圏域市民の皆さんの協力を得ながら体制を整備し、実現をめざします。	●地域の自然・文化・歴史・産業など様々な資源を、地域の皆さんと協力しながら、科学的な観点から価値づけ、その価値を広く発信し、さらに新たな地域資源をつくり上げていきます。こうした活動を通して、地域の人々の「地域参画力」を高めていきます。 ●科学教育のためのコンテンツやプロダクト、研修プログラムなどを、協力者とともに開発し普及させていくセンター的な役割を展開します。 ●地域の学術機関や地域産業との連携を深め、協働で多摩六都圏域の特徴を基にした「地域づくり」事業の推進を図ります。 ●多摩六都圏域だけでなく、多摩地区全体にも視野を広げ、気づかずに見過ごしている資源（地域づくりを実践できる創造的な人材やソフトも含む）の掘り起こしを行い、共有できるしくみを整備します。 ●長期的・間接的な効果として、科学の担い手の育成、新たな産業創出も展望として掲げ、事業の展開を図ります。	●科学教育のためのコンテンツやプロダクト、研修プログラムなどの開発活動（数と内容） ●上記利用者・参加者の評価（効果と満足度） ●科学的な観点からの地域資源の掘り起こし・価値づけ・発信などの活動（数と内容） ●地域連携事業、協働事業の実施 ●上記参加者の評価（効果と満足度） ■「地域の振興に寄与できる科学館」としての評価 ■「地域資源を生かした運営」に対する評価

凡例　重要度　●：レベル1（必須）　●:レベル2　●：レベル3

凡例　●：重点指標　●：指標候補　■：長期的な成果指標

		事業目標　Goal	取組方針　Policy	重点戦略　Strategy	業績指標（案）　Performance measures
経営管理計画	マーケティング	事業目標4 **愛着の持てるロクトへ** **多摩六都科学館は、圏域市民の認知度・利用度を高め、利用者の満足度向上をめざします。さらに、市民から愛着を持って「自分の科学館／地域の科学館」と認められる存在となります。**	圏域市民の認知度・利用度を伸ばすことが今後の課題です。広報活動、ニーズ調査をパラレルに行いながら、認知度・利用度・満足度のアップをめざします。 長期的には、圏域市民の科学館に対する価値観を高めることをめざします。	●利用状況やニーズを分析し、認知度・利用度・満足度を高める取組みを中長期的な観点から推進します。利用者を第一に考え、常に質の高いサービスを提供します。市民や利用者の声を長期的に反映させやすいしくみを検討します。 ●多摩六都科学館が圏域市民のために運営されている施設であることの認知度をアップさせる方策を行います。広報については、エリア戦略とプロモーション戦略を検討し、効果分析しつつ、有効かつ効率的な方法で展開します。 ●利用度を高めるためにアクセスの改善を図ります。圏域内のバスの運行やコミュニティサイクル等の導入を検討します。 ●障害のある方も、外国の方も、誰もが利用しやすいよう、ユニバーサルデザインに基づいたバリアフリー・多言語対応等を推進します。 ●利用者の満足度が低い施設を改善します。 ●館名のわかりづらさは、愛称やキャッチコピー、VI（ヴィジュアル･アイデンティティー）等を導入し、コミュニケーション計画*5 の改善を図ります。	●圏域市民の科学館の認知度・利用度・満足度 ●圏域市民の新規来館者数（非利用者へのアプローチ策数） ●利用者の満足度（平日・休日） ●ユニバーサルデザインの取組件数 ●利用者の声を反映した改善策の実施（数と内容） ●スタッフの満足度（個人・組織の原動力） ●利用者数 ●アクセス・交通の便改善策の実施 ●「交通の便を改善し利用しやすい科学館」としての評価 ●満足度が低い施設の改善（件数と効果） ■「自分の科学館／地域の科学館として価値ある存在」としての評価 ■「市民から愛される科学館」としての評価
	財政計画・体制整備	事業目標5 **持続可能な** **しくみづくりを** **多摩六都科学館は、ソフト・ハード両面の改善が推進できる健全な財政計画や協働体制を立案実行し、地域貢献できる施設として持続可能な発展をめざします。**	第1次基本計画時に策定した財政計画によって、プラネタリウムや常設展示のリニューアルが無事に実現できました。第2次基本計画でも、持続可能な成長・発展ができるよう、ハードだけでなくソフトの質的充実も図れるよう、財源の確保・体制整備を推進します。	●負担金・利用料金以外の外部資金の導入・活用策（寄附金、助成金、補助金の確保の他、ネーミングライツ、賛助組織など）を検討します。 ●地域連携・協働体制（ともにつくりあげていくしくみ）の整備も早急に検討を行います。 ●常に魅力的な施設であるために、展示やプラネタリウム等の定期的なリニューアルが実現できるよう財政計画を検討します。 ●駐車場が不足しているなど施設に関する課題を解決するための取組みを行います。交通機関の協力や投資の必要もありますが、長期的な観点から改善策を検討します。 ●継続的なコンテンツ開発、優秀な人材の確保など、ソフト整備も長期的観点に立ち、財源確保を図ります。	●財政計画の立案 ●外部資金の調達（金額と内容） ●ともにつくりあげていくしくみの整備推進 ●駐車場の再整備 ●優秀な人材の確保および育成（研究者・学芸員の充実） ■持続可能な財政計画・体制整備の推進（質的評価）

凡例　重要度　●：レベル1（必須）　●:レベル2　●：レベル3

凡例　●：重点指標　●：指標候補　■：長期的な成果指標

5. 事業評価の進め方

（1）基本計画の見直しと自己評価

- 基本計画は、各年度毎に見直しを図ります。
- 重点戦略ならびに業績指標は、年度毎に定める事業計画の中で、組合と指定管理者が協議の上、決定します。
- 重点戦略も指標数は多くせず、メリハリをつけて決定し、戦略的に事業に取り組みます。
- 重点戦略ならびに業績指標だけでなく、事業目標・取組方針も、進捗状況や外部環境・内部環境の変化に応じて、見直しの対象とします。
- 設定した目標や取組が達成できなかった場合は、その理由を環境要因も含めて分析し、今後の取組に生かします。
- 多摩六都科学館は、これまで同様、自己評価を実施します。
- 圏域市民に対し、説明責任を果たすため、これまで通り、事業計画ならびに事業評価の結果を公開します。
- 基本計画の中期的な区切りは、指定管理者制度と整合させ、下図のように設定します。

	第2次基本計画の期間（H26～H35）									
年度	H26	H27	H28	H29	H30	H31	H32	H33	H34	H35
	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023
中期	3カ年			7カ年 （次期指定管理期間に応じて、中期の期間を設定）						
	現行の指定管理期間 H24~H28									

（2）事業評価委員会による外部評価

これまで同様、組合の事業評価委員会による外部評価を実施します。

事業評価委員会では、下記について評価し、多摩六都科学館の事業が有効かつ効率的に実施されるよう監理します。評価結果は、圏域市民への説明責任を果たすため、これまで通り公開します。

- 毎年策定される事業計画の妥当性（本基本計画に沿う内容か、目標設定は妥当か）を検証します。
- 各年度毎の事業の結果・成果の報告を受け、使命・事業目標・重点戦略・業績指標の達成度を検証します。
- 次年度の取組方針についても検証します。
- 事業の有効性については、専門家の立場から質的な評価も行います。

註

***1：「たまり場」**とは

地域のさまざまな人が気軽に集まり、日常的に交流できるコミュニティスペースを表す。新しい地域型科学館を創るという目的で、利用者や運営者という垣根を越えて、そこに集う人々が対等に交流し、活動できる場をめざす。

***2：「ハブ」**とは

科学館が車輪の軸のようになって、周囲のコミュニティーを相互に結びつける機能を表す。地域のさまざまな主体・組織の人的交流や情報の結節点となる場所、あるいはさまざまなネットワークの拠点施設のひとつとなることを指す。

多摩六都科学館は、地域資源をつなぐ結節点（ハブ）やつなぎ手役をめざします。

加工したマップの出典：「多摩六都広域連携プラン」（平成23年３月）ならびに「さんぽマップ」（平成21年3月）ともに多摩北部都市広域行政圏協議会作成

***3：「地域資源」**とは

地域に存在する有形・無形にとらわれずすべての資源を指し、自然・歴史・文化的な資源だけでなく、科学技術や産業、観光等、幅広い分野を網羅するもの。ひと、ノウハウや知見などのソフトも含む。

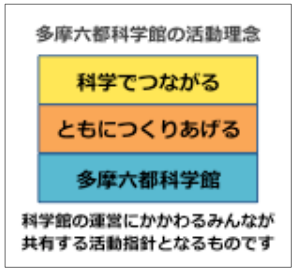
●多摩六都圏域の地域資源と考えられる例

- 自然：玉川上水（小平市）、八国山（東村山市）、金山緑地公園（清瀬市）、南沢湧水（東久留米市）、東大農場・演習林（西東京市）等
- 大学：嘉悦大学、白梅学園大学・白梅学園短期大学、津田塾大学、文化学園大学、一橋大学、武蔵野美術大学（小平市）、明治薬科大学（清瀬市）、武蔵野大学（西東京市）等
- 研究機関：東京大学原子核研究所、東京大学宇宙線研究所（西東京市：小柴昌俊博士、小林誠・益川敏英両博士のノーベル物理学賞受賞に関係した研究施設、いずれも現在は移転）、東京都薬用植物園（小平市）等
- 芸術・文化：平櫛田中（小平市）、石田波郷（清瀬市　俳人）等
- アニメ：トトロの森・八国山（東村山市）、めぞん一刻（東久留米市）等
- スポーツ：FC東京（小平市）等
- ひと：企業、研究・教育機関でキャリアを積んだ方、子育てやお年寄りとの交流が好きな方、地域づくりに熱意のある方　等

多摩六都科学館新キャラクター「ペガロク」
2012年から現行の指定管理者が設定
@ドワーフ／多摩六都科学館

***4：「ロクト」**とは

現行の指定管理者が設定した愛称。ロクトの他に Rokuto と表記する場合もある。この愛称は定着しつつあるので、本基本計画でも継承し、事業目標のキャッチコピーとして採用。



***5：「コミュニケーション計画」**とは

多摩六都科学館がどのような方向性や役割を担っている科学館であるかが伝わるよう、視覚的にも工夫し、認知度を高めるために行う広報活動を指す。また、本計画の使命や活動理念を共有し、「ともにつくりあげていく」仲間を増やしていくことを目的とするPR／パブリック･リレーションズ活動（社会とのよりよい関係づくり）を指す。

（1）多摩六都科学館基本計画策定の経緯

日程	名称	内容・参加者
平成25年 ５月28日	第１回 基本計画策定委員会	有識者及び市民からなる委員の初会合。これまでの計画、事業評価等を確認し、第２次基本計画策定の道筋を定めた。
平成25年 ６月13日	第１回 基本計画策定委員会専門部会	戦略計画策定ワークショップを開催し、様々な立場の職員、ボランティアが加わりグループ討議と発表を行って、科学館の現状と将来像の共有化を図った。 ・科学館の現状分析（SWOT分析） ・戦略の方向性の検討 ・使命、中長期目標の検討
平成25年 ８月26日	第２回 基本計画策定委員会	第１回専門部会の報告と市民調査の中間報告を行い、多元的な現状分析に基づき、包括的な使命・中長期目標の設定、戦略の展開等について協議した。
平成25年 10月3日	第３回 基本計画策定委員会 第２回 基本計画策定委員会専門部会	市民調査結果の報告の後、第２回専門部会を兼ねて、ワークショップ形式でグループ討議・発表を行った。計画策定の背景、目的、市民調査等の分析を説明し、３グループに分かれて使命・中長期目標・戦略等の詳細な協議を行い、発表した。
平成25年 10月24日	第３回 基本計画策定委員会専門部会	基本計画のたたき台の検討を行った。
平成25年 12月9日	第４回 基本計画策定委員会	これまでの検討を総括し、素案を検討した。また、市民調査のクロス集計結果等の新たなデータを基に文言や考え方の調整を図った。

10月24日以降、平成26年1月20日に計画が確定するまで、館長、現場スタッフ、ボランティア、基本計画策定委員、事業評価委員等へ個別にヒアリングを実施し、様々な関係者が「ともにつくりあげる」「価値を共創できる」基本計画の策定に努めた。

（2）多摩六都科学館基本計画策定委員会 委員名簿

（五十音順・敬称略）

区分	氏名	所属
学識経験者（天文普及）	◎　縣　秀彦	大学共同利用機関法人自然科学研究機構 国立天文台天文情報センター准教授
行政関係者	飯野　雄資	東京都総務局行政部多摩振興担当課長
学識経験者（教育学）	○　小川　義和	独立行政法人国立科学博物館 学習企画・調整課長、筑波大学客員教授
学識経験者（科学館）	高橋　真理子	山梨県立科学館天文アドバイザー
学識経験者（行政経営）	玉村　雅敏	慶應義塾大学 総合政策学部准教授
圏域市民	福本　志濃夫	小平市在住市民

◎：委員長、○：副委員長

（3）多摩六都科学館基本計画策定委員会設置要綱

平成25年４月１日制定

（設置）

第１　多摩六都科学館組合（以下「組合」という。）が多摩六都科学館の管理運営を計画的に推進することを目的とし、多摩六都科学館基本計画を策定するため、多摩六都科学館基本計画策定委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

（所掌事項）

第２　委員会は、次の各号に掲げる事項を所掌する。

(1) 基本計画の策定に関すること。

(2) その他組合管理者が必要と認める事項に関すること。

２　委員会は、前項の所掌事項に関し検討を行い、基本計画案を作成して組合管理者に報告する。

（組織）

第３　委員会は、６人以内の委員をもって組織する。

２　委員は、次の各号に掲げる者のうちから組合管理者が委嘱する。

(1) 識見を有する者

(2) 博物館・科学館の運営に関する専門家

(3) 前号に掲げる者のほか、計画策定に関係する機関に属する者

(4) 多摩六都圏域に居住する市民

(5) その他組合管理者が必要と認める者

（役員）

第４　委員会に委員長及び副委員長を置く。

２　委員長及び副委員長は、委員の相互により選出する。

３　委員長は、委員会を代表し、会務を総括する。

４　副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるとき、又は委員長が欠けたときは、その職務を代理する。

（会議）

第５ 委員会は、必要に応じて委員長が招集する。

２　委員会は、委員の半数以上が出席しなければ会議を開くことができない。

３　委員長は、必要に応じて委員以外の者の出席又は資料の提出を求めることができる。

４　委員が会議に出席したときは、予算の範囲内で謝金を支払う。

（専門部会）

第６　委員会は、下部組織として専門部会（ワーキングチーム）を置く。

２　専門部会は、第２条に掲げる所掌事項について調査・検討のうえ、計画案の作成を行い、その結果を委員会に報告するものとする。

３　専門部会は、委員会の指名する者をもって構成する。

（設置期間）

第７　委員会及び専門部会の設置期間は、第２条に掲げる報告をもって終了する。

（庶務）

第８　委員会及び専門部会の庶務は、組合管理課において処理する。

（委任）

第９　この要綱に定めるもののほか、必要な事項は組合管理者が別に定める。

附　則

この要綱は、平成25年４月１日から施行する。

（4）市民調査結果

多摩六都圏域内五市（小平市、東村山市、清瀬市、東久留米市、西東京市）の幅広い年齢層の住民を対象に、非利用者も含めて、多摩六都科学館に対する評価やニーズを把握するために行いました。
調査は7種類計画しており、平成25年11月の段階で、調査1～5は実施済（ピンクの丸数字）。調査6～7は、平成26年1月～3月に実施予定。

調査目的

第2次基本計画策定の検討に活用
予算取りの根拠データではなく、今後の方向性を見定めるための有効な意見を収集
定性調査を主とする

これまでの検証 実績評価
数値データが必要、定量調査を主としてデータ収集

調査項目

- 市民の科学館への要望
- 期待される科学館像
- 認知度・利用度・満足度
- 科学館利用にかかわる課題
- 課題（事業・施設・展示・人・運営等）
- 地域の生涯学習の課題

目標の達成度
- ミッション
- 目標（社会に開かれた科学館）
- 達成目標（社会貢献、利用者中心、専門機能の充実）
- 基本理念

★リニューアルの効果、施設整備の調査は別途

調査対象

多摩六都圏域
５市の市民
- 小平市
- 東村山市
- 清瀬市
- 東久留米市
- 西東京市

幅広い年齢層から意見聴取

★抽出と分析の際の留意点
リニューアル前にだけ利用した人と、リニューアル後のみ利用した人では意見が異なる可能性があるので要注意。
はじめて来館の人、非利用者調査の際、要注意。

- 利用者
  - 個人利用 ② ③
  - 学校団体 ② ③
  - 継続利用 ①
  - ボランティア ①
  - 非利用者
    - 個人利用 ⑤ ⑦
    - 団体 ④
- 連携対象
  - 教育委員会 ⑥
  - 教員 ⑥
  - 大学 ⑥
  - 企業 ⑥
  - 市民団体 ⑥
  - ボランティア ⑥
  - 現場スタッフ等 ⑥

調査方法

館内　平日・休日、団体は夏休み前
個人：質問紙、団体：質問紙
個人：200件、団体：100件

予備調査も兼ねて、ミッション・基本理念の達成状況を検証、約80～90件

5市の施設　26箇所
図書館、児童館、ホール、スポーツ施設等
質問紙
各施設20件以上、自治体別100件以上

インターネット調査（予定）
5市並びに周辺地域の幅広い市民から意見聴取できる可能性あり、実験的に実施も視野に入れる。

5市の小中学校、幼稚園、保育園、
70校に絞り込み
質問紙・郵送法

今後の方向性、具体策等地域のキーパーソンから意見聴取
住民層×地域×利用の有無でグループ分け、グループインタビュー

特に、圏域市民の利用状況や非利用者のニーズを把握するために、下記のような調査を実施した。（調査5-個人利用状況調査-圏域内の公共施設利用者対象）

調査目的

■多摩六都圏域５市（小平市、東村山市、清瀬市、東久留米市、西東京市）の公共施設利用者を対象に、多摩六都科学館の利用状況・改善点・今後の科学館像・過去10年間の実績評価について分析するために調査を行った。

■調査対象は、施設利用の個人利用者の大人と児童（小学校6年生以下）。

調査方法・回収結果

■調査方法：質問紙によるアンケート（自記式）。圏域内の公共施設に協力をしてもらい、出入り口付近に机と椅子を設置し、調査員を派遣して行った。
大人・児童とも調査２（館内調査）の利用者と圏域内の方たちのデータを比較できるよう、質問項目を設定した。

■実施日：平成25年8月2日～8月31日、1か月程かけて実施。

■調査施設：市毎に5～6施設選定。施設種毎に各市とも1施設を基本とし27施設選定。うち１件を取り止め、合計26件の施設で調査を行った。1施設目標サンプル数に満たなかったため、追加調査を実施、調査延べ日数は27日。

■目標サンプル数：各施設20件以上、それぞれの自治体で100件以上を目標サンプル数とした。

■サンプリング方法：多摩六都科学館の認知度・利用度等を調査するのが目的であるため、館内調査とは異なり、各施設に入る方、帰る方全員に声がけし、調査依頼を行った。幅広い年齢層のサンプルが採取できるよう努めた。

■回収サンプル数：大人639件、児童146件、合計785件。
どの自治体も大人・児童を合算すると各々ほぼ目標の100件を得ることができた。また、圏域５市の人口726,817人（平成25年7月1日現在）を母数とした場合、本調査のサンプリング誤差は3.5%で、一般的な社会調査の範囲内（１～5%）を担保できた。

市民調査5　圏域内施設における科学館の利用実態調査　サンプル数一覧

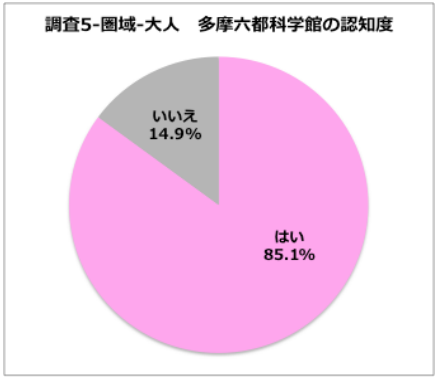
No.	市	区分	調査日	内訳 大人	児童	計	市別 大人	市別 児童	市別 計
1	小平市	A図書館	8月4日（日）	56	5	61			
2		B公民館	8月26日（金）	35	1	36			
3		C美術館	8月28日（日）	7	1	8			
		C美術館（追加調査）	8月11日（日）	17	1	18			
4		Dホール系・芸術文化施設	8月27日（土）	19	2	21			
5		Eスポーツ施設	8月26日（金）	24	5	29	158	15	**173**
6	東村山市	F図書館	8月30日（火）	22	8	30			
7		G公民館	8月2日（金）	17	5	22			
8		H児童館	8月19日(金)	12	12	24			
9		I博物館	8月28日（日）	23	4	27			
10		Jスポーツ施設	8月25日（木）	20	6	26	94	35	**129**
11	清瀬市	K図書館	8月20日（土）	39	9	48			
12		L児童館	8月28日（日）	27	9	36			
13		M生涯学習	8月26日（金）	25	0	25			
14		Nホール系・芸術文化施設	8月19日(金)	26	12	38			
15		O博物館	8月14日（日）	30	0	30	147	30	**177**
16	東久留米市	P図書館	8月29日（月）	30	5	35			
17		Q芸術・地域センター施設	8月26日（金）	22	2	24			
18		R複合施設	8月31日（水）	18	3	21			
19		S児童館	8月17日（水）	13	14	27			
20		Tスポーツ施設	8月17日（水）	24	1	25	107	25	**132**
21	西東京市	U図書館	8月27日（土）	22	6	28			
22		V公民館	8月31日（水）	21	7	28			
23		Wホール系・複合施設	8月19日(金)	28	3	31			
24		Xホール系・芸術文化施設	8月28日（日）	16	6	22			
25		Yスポーツ施設	8月31日（水）	21	4	25			
26		Z児童館	8月19日(金)	25	15	40	133	41	**174**
				639	**146**	**785**	**639**	**146**	**785**

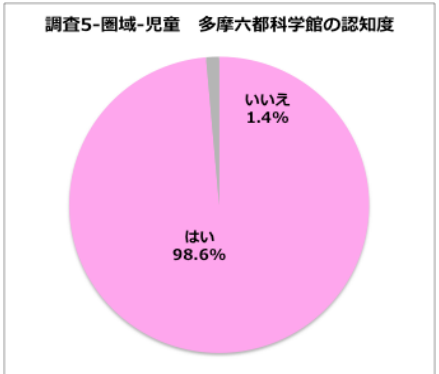
多摩六都科学館の認知度

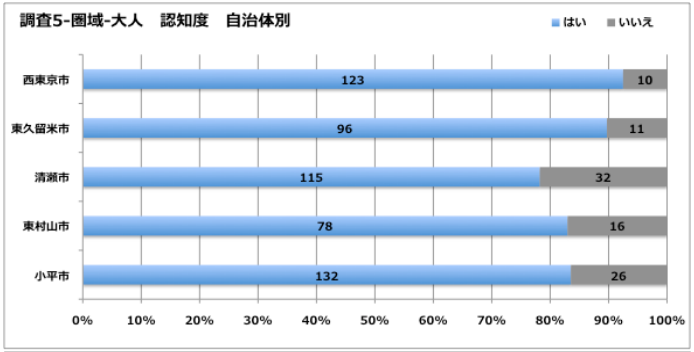
■**多摩六都圏域内での認知度：**
当館の認知度は高いと言えるが、まだ名前も聞いたことがない人が15%近くいることがわかった。

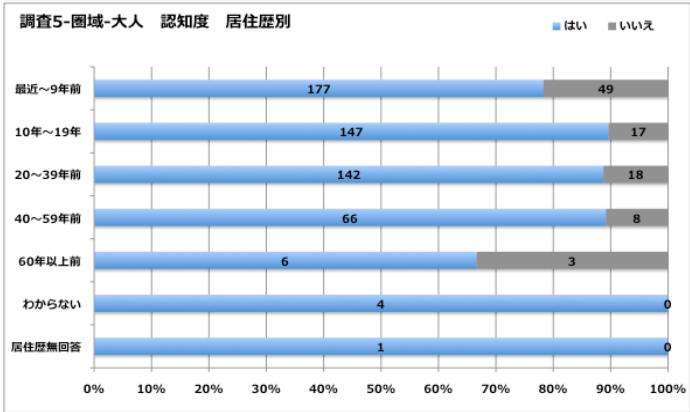
■**クロス集計結果から：**
60年以上前からの居住者の認知度が低いことがわかる。
また、最近転入したきた人（特に20歳代）は、まだ存在を知らない傾向が見られた。

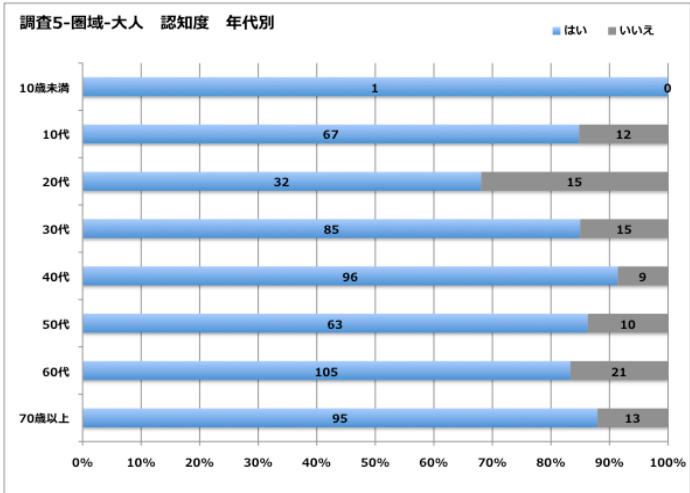
調査5-圏域内調査











註：グラフ内の数値は、割合（%）ではなく回答件数（人）

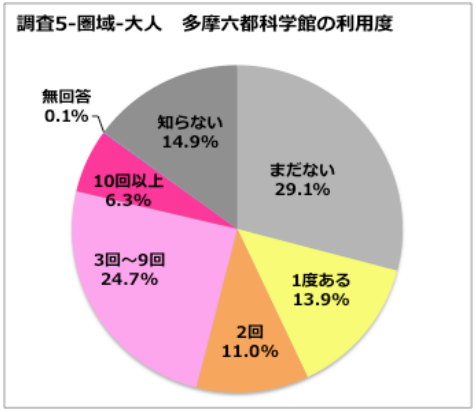
多摩六都科学館の利用度

■**大人**：圏域内調査（調査5）では、「知らない」「まだ利用したことがない」を合わせると、大人では44%を占めている。
利用回数は、館内（調査2）も圏域内調査（調査5）でも、「3回～9回」が多い傾向が見られる。

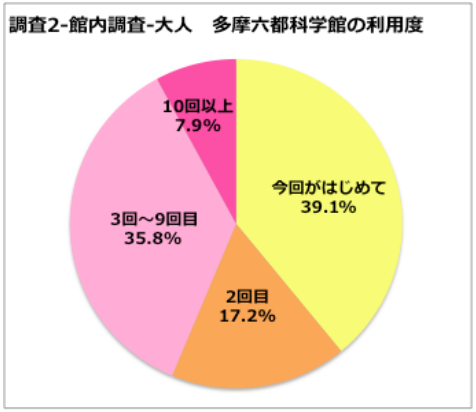
■**児童**：圏域内調査（調査5）で「知らない」「まだ利用したことがない」を合わせた非利用率は、大人の割合よりもかなり低く8%。
館内（調査2）も圏域内調査（調査5）でも、児童はリピーターが多いことがわかる。
学校団体利用の児童（調査3）は、はじめての割合が高い傾向が見られる。

大人

調査5

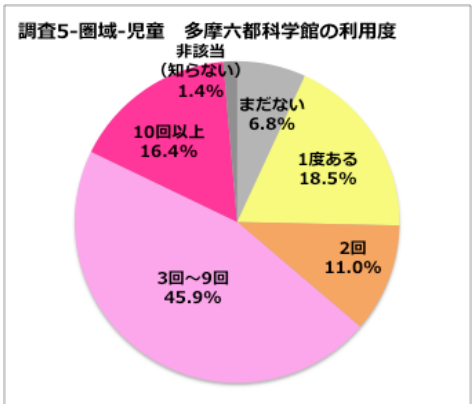


調査2

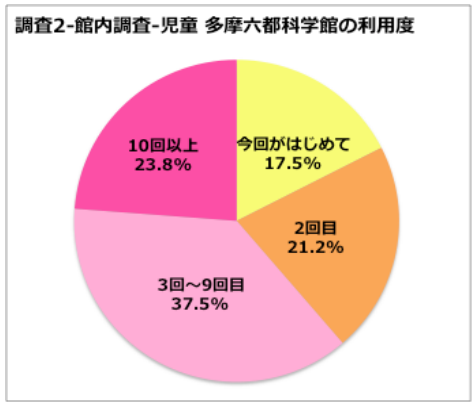


児童

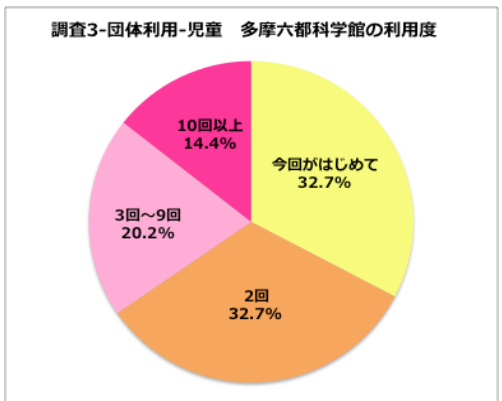
調査5



調査2



調査3



利用しなかった理由（非利用者対象）

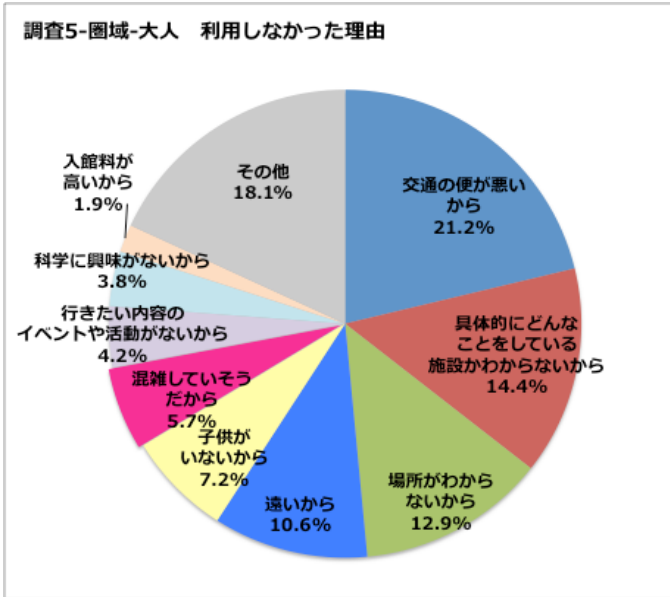
■これまで利用しなかった理由：

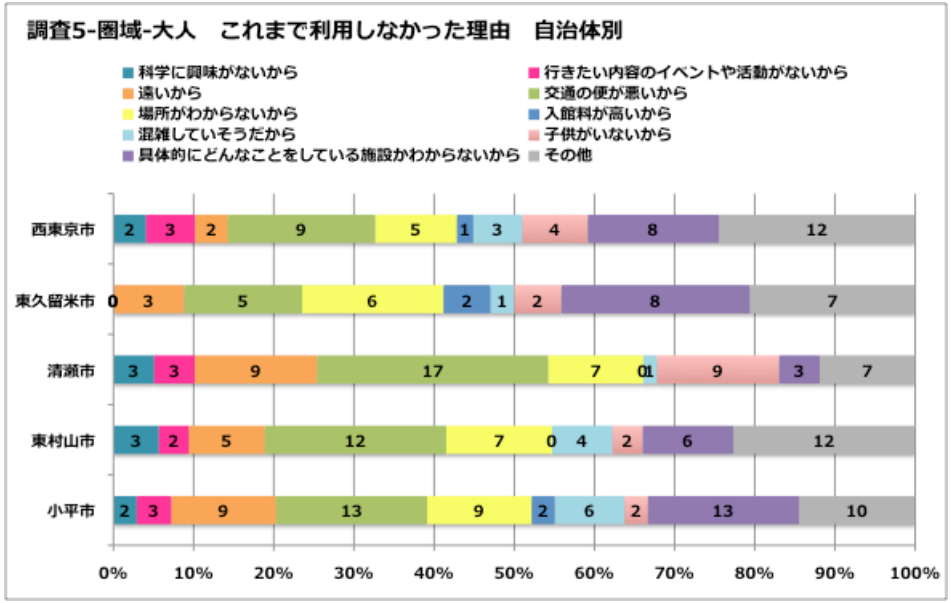
「交通の便が悪い」「具体的にどんなことをしている施設かわからない」「場所がわからない」「遠いから」があげられている。また、その他の自由回答によると、子どもが小さいから等、「自分の子どもが小さいから行くのにふさわしい場所ではない」と判断してしまっている傾向が見られる。しかし、館内の利用者にとっては、「幼児でも十分に楽しめる場所」との認識がある。

■自治体別のクロス集計：

清瀬市は特に「交通の便が悪い」「子どもがいないから」が多い。東久留米市は「具体的にどんなことをしている施設かわからない」が多い傾向が見られる。

調査5-圏域内調査-非利用者のみ-大人





註：グラフ内の数値は、割合（%）ではなく回答件数（人）

多摩六都科学館の満足度

■**大人**：館内（調査2）の個人利用者は、「満足」の割合が6割強を占めており、「満足」と「どちらかといえば満足」を足すと9割強を占めており、大変満足度の高い科学館と言えよう。

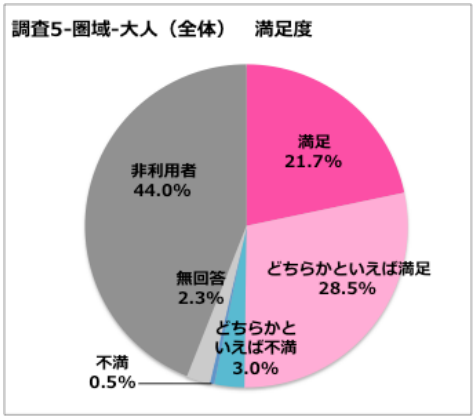
圏域内調査（調査5）では、「満足」よりも「どちらかと言えば満足」の割合が幾分高い傾向が見られるが、科学館利用経験者のみの数値を見ると「満足」と「どちらかといえば満足」を足すと、館内調査同様、9割強を占めていることがわかる。

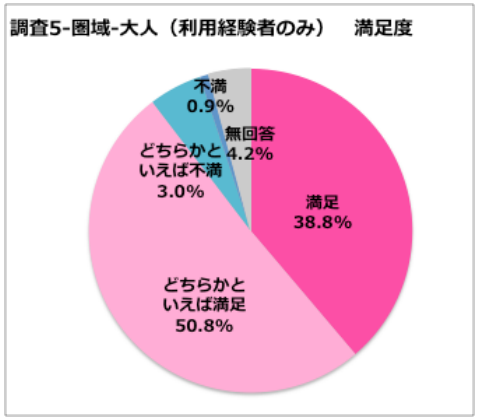
■**児童**：館内調査では、個人利用（調査2）も団体利用（調査3）も8割強が「とても満足」と回答。圏域内調査（調査5）でも、科学館利用経験者のみであれば、「とても満足」の割合は約75%を占めており、児童の満足度が大変高いことがわかる。

「とても満足」と「やや満足」を合わせると、3つの調査とも、利用経験者では95%以上と非常に高いことがわかる。

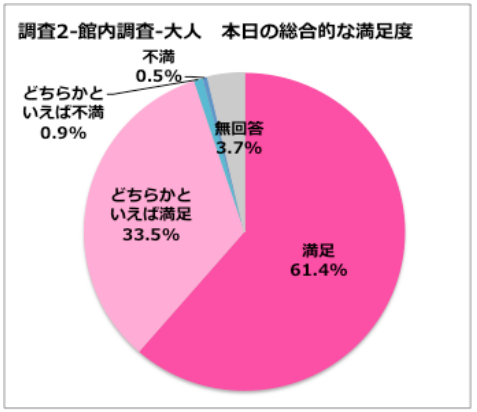
大人

調査5　圏域住民対象調査（非利用者含む）



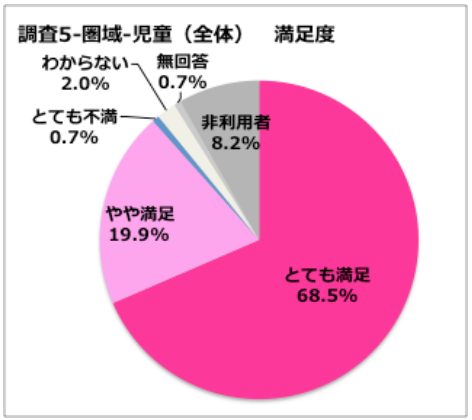


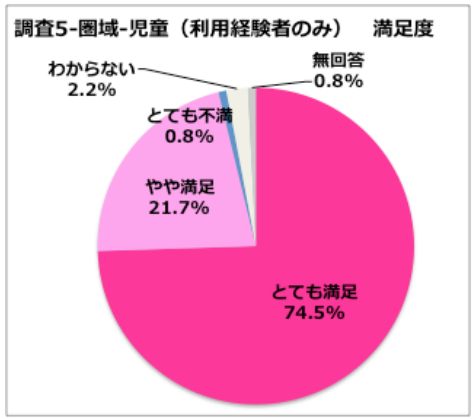
調査2



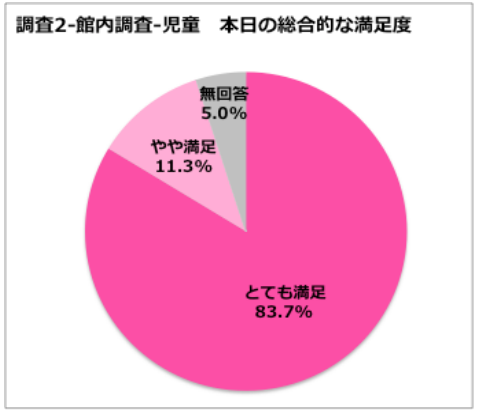
児童

調査5

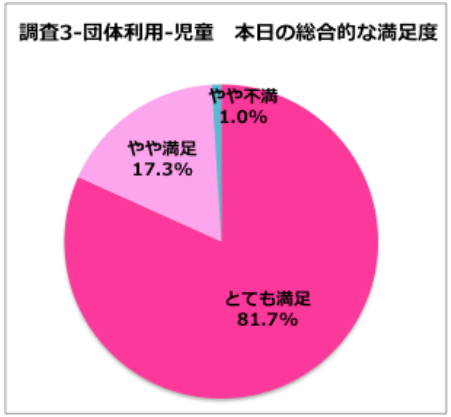




調査2



調査3



多摩六都科学館の体験による科学への興味喚起度

児童（3つの調査）と圏域内調査の大人を対象に行った。

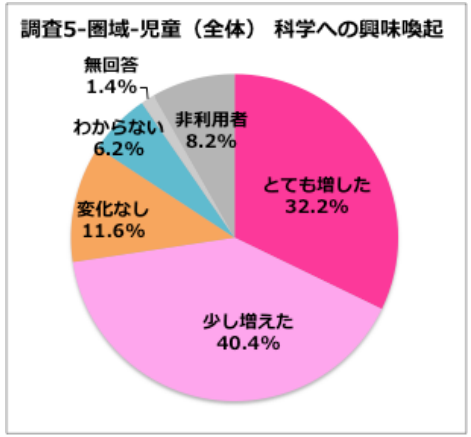
■**児童**：学校団体（調査3）で利用の児童は、学習へのモチベーションが高いためか、「とても増した」が多い傾向が見られる。「少し増えた」も合わせると９割強となる。個人利用の児童は、館内（調査2）も圏域内調査（調査5のうち利用経験者のみ）も、「とても増した」「少し増えた」を合わせると約8割を占めている。

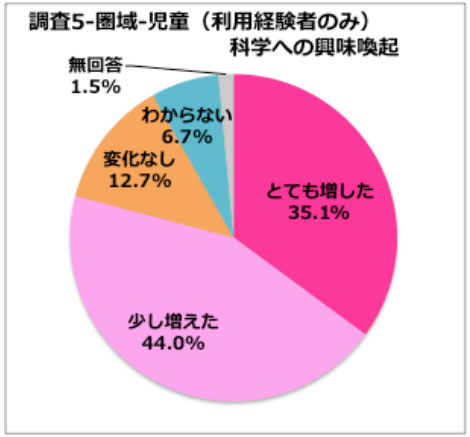
児童にとって、多摩六都科学館の体験は、団体・個人の利用のどちらにおいても、「科学への興味喚起度」は高いことがわかる。

■**大人**：圏域の大人の場合（調査5）でも利用経験者のみであれば、「とても増した」「少し増えた」も合わせると約8割を占めている。

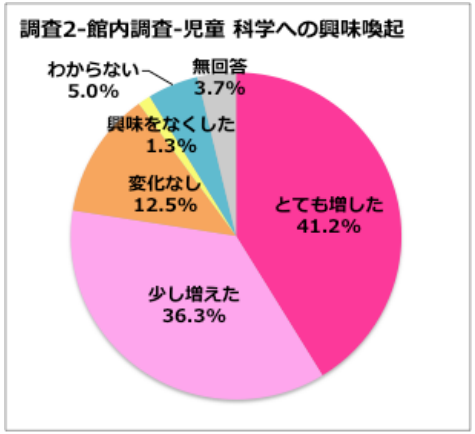
児童

調査5　圏域住民対象調査（非利用者含む）

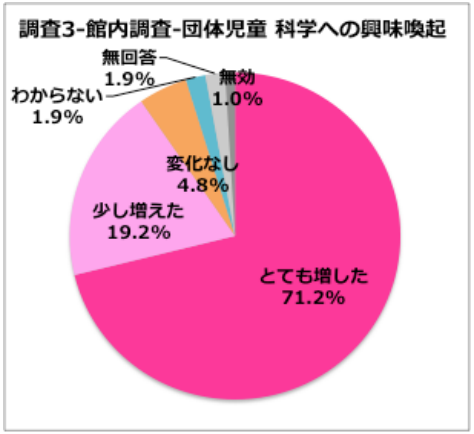




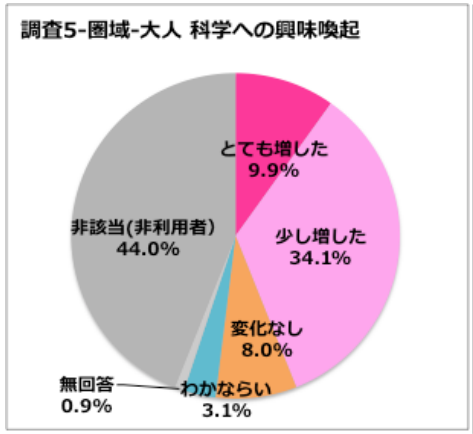
調査2

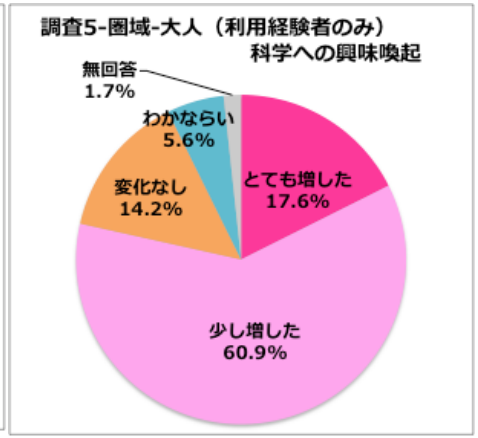


調査3



大人





過去10年の実績評価

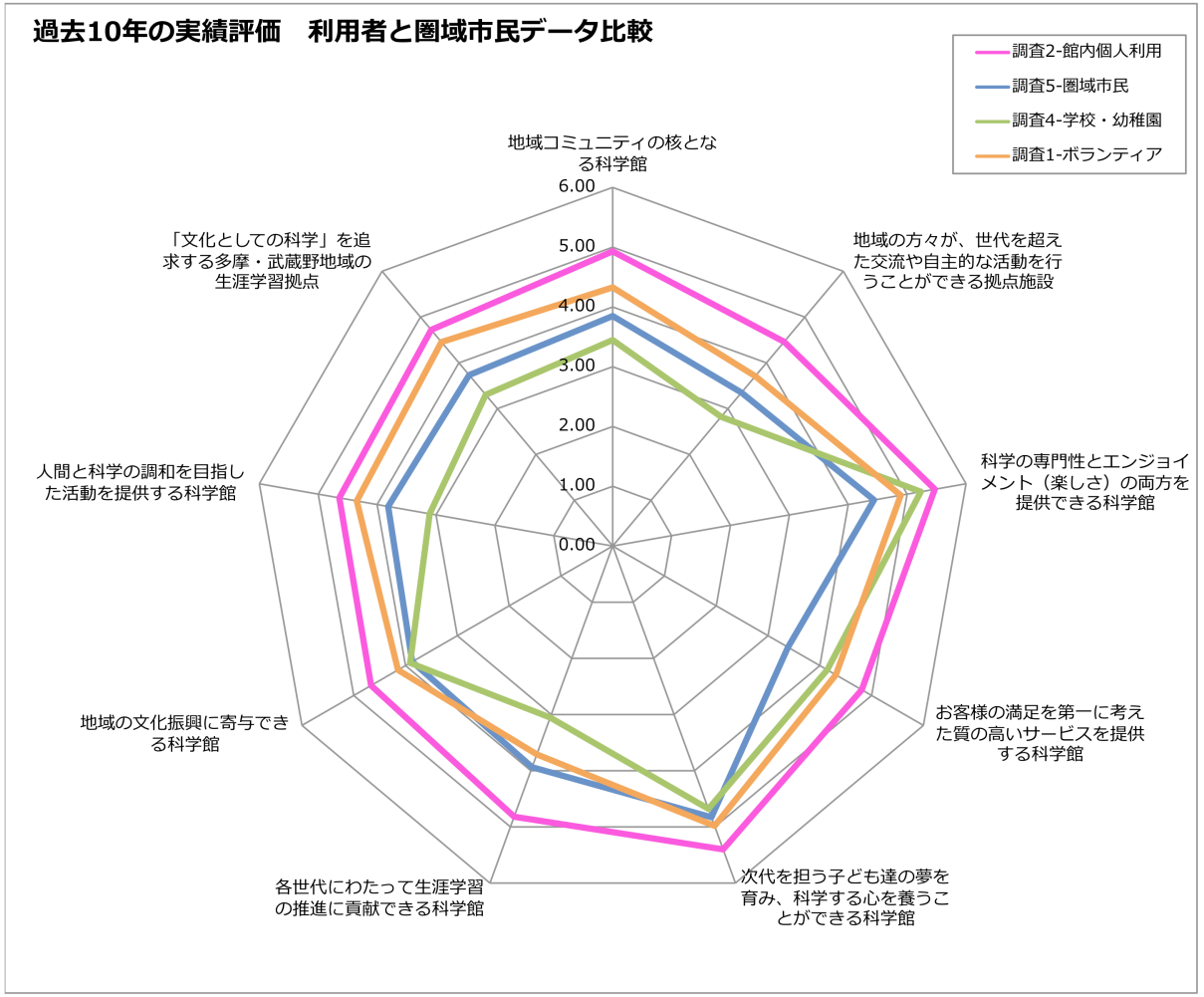
■レーダーチャートで調査間データを比較：

「次代を担う子ども達の夢を育み、科学する心を養うことができる科学館」という役割に関しては、どの調査でも、高い評価を受けている。

「科学の専門性とエンジョイメントの両方を提供できる科学館」に関しては、団体利用の学校や幼稚園からの評価が高い。

「地域の方々が、世代を超えた交流や自主的な活動を行うことができる拠点施設」、「『文化としての科学』を追求する多摩・武蔵野地域の生涯学習拠点」に対する評価は、他と比べると低い傾向にあることがわかる。

計算式　（大いに思う度数×7）＋（やや思う度数×5）＋（あまり思わない度数×3)+(全く思わない度数×1）/回答数



これから先10年の科学館像・地域の拠点施設像

■**大人**：

圏域内の市民（調査5）と館内の利用者（調査2）で、求めている科学館像に違いが見られることがわかる。

館内利用者よりも圏域市民に多かったのは、下記5つの科学館像。

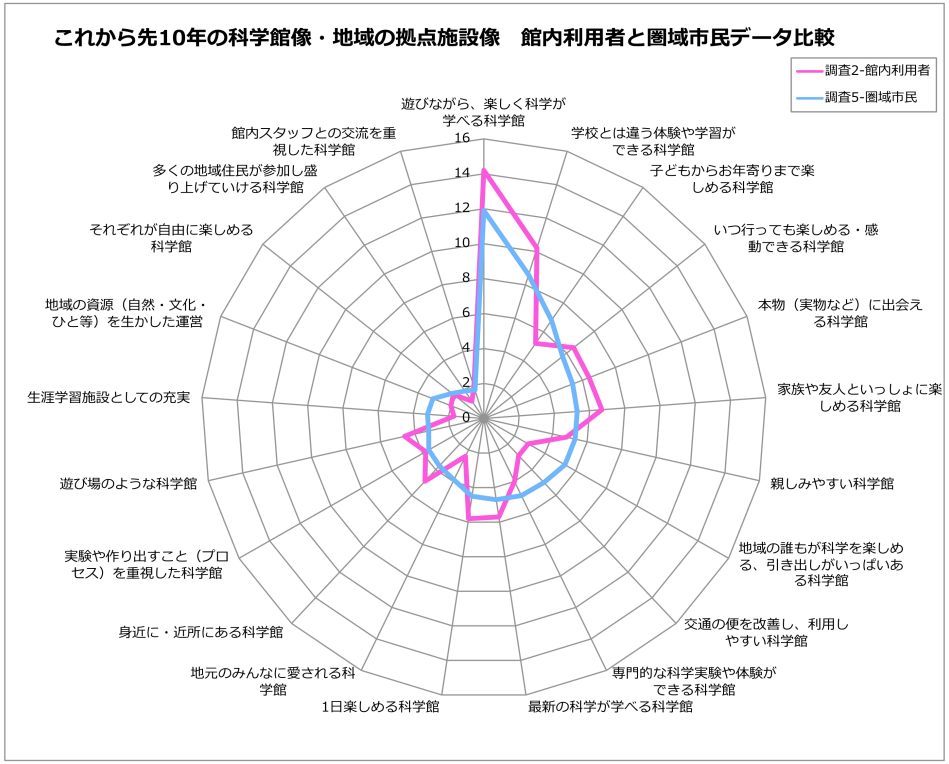
- 「交通の便を改善し、利用しやすい科学館」
- 「地域の誰もが科学を楽しめる、引き出しがいっぱいある科学館」
- 「地元のみんなに愛される科学館」
- 「地域の資源（自然・文化・ひと等）を生かした運営」
- 「生涯学習拠点としての充実」

■**児童**：

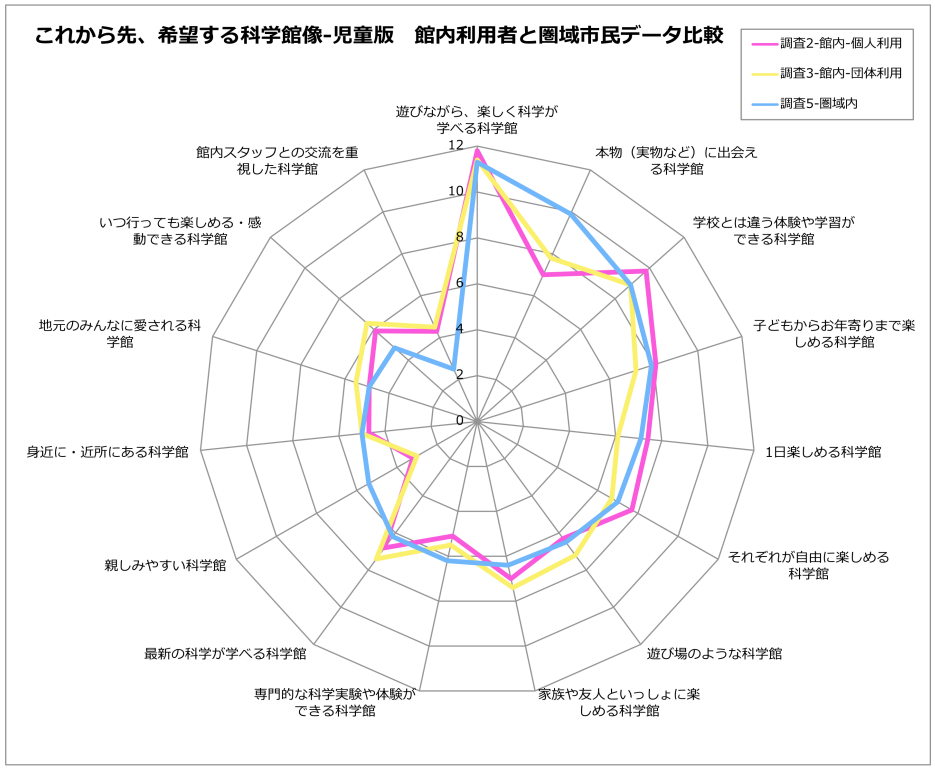
「本物に出会える科学館」「親しみやすい科学館」に関しては、館内利用者（調査2）と圏域市民（調査5）では差がでている。館内児童では低く、圏域内の児童では要望が高いことがわかる。

「館内スタッフとの交流を重視した科学館」が全般的に低いのは、科学館でスタッフと交流できることを知らない児童がいる可能性を示唆している。

調査5のデータを降順で並べ替え。調査2と調査5(館内利用者と圏域市民）の認識の違いを視覚化



数値：全回答数のうちの割合、調査5のデータを降順で並べ替え、調査2・3と調査5(館内利用者と圏域市民）の認識の違いを視覚化



■**大人のランキング**

「交通の便を改善し、利用しやすい科学館」は、明らかに館内利用者（調査2）よりも圏域市民（調査5）からの要望が大きいことがわかる。また、「館内スタッフとの交流を重視した科学館」「多くの住民が参加し盛り上げていける科学館」「生涯学習」に関しては館内利用者・圏域市民ともに低い傾向が見られる。館内利用者でさえも、「館内スタッフとの交流を重視した科学館」という選択肢が低い傾向が見られる。

多摩六都科学館に求められている体験型とはどのようなものなのか、第２次基本計画ではどのような方向にシフトしていくのか考慮する必要がある。

色分けの凡例：地域のいろいろな人たちと楽しめるイメージの科学館像を求めているものにはオレンジ、本物に出会える科学館等の項目にはグリーン、地域市民を活かすものにはブルー、生涯学習や親しみやすい等の項目はイエロー、交通の便に関するものにはパープルで色分けを行った。

調査2　　**調査5**

これから先10年の科学館像・地域の拠点施設像　ランキング

割合	回答数	調査2-館内利用者	ランキング	調査5-圏域市民	回答数	割合
14.2	155	遊びながら、楽しく科学が学べる科学館	1	遊びながら、楽しく科学が学べる科学館	466	11.9
10.2	111	学校とは違う体験や学習ができる科学館	2	学校とは違う体験や学習ができる科学館	338	8.6
6.7	73	家族や友人といっしょに楽しめる科学館	3	子どもからお年寄りまで楽しめる科学館	265	6.8
6.5	71	いつ行っても楽しめる・感動できる科学館	4	いつ行っても楽しめる・感動できる科学館	222	5.7
6.4	70	本物（実物など）に出会える科学館	5	本物（実物など）に出会える科学館	213	5.4
5.8	63	1日楽しめる科学館	6	地域の誰もが科学を楽しめる、引き出しがいっぱいある科学館	208	5.3
5.7	62	最新の科学が学べる科学館	7	家族や友人といっしょに楽しめる科学館	207	5.3
5.2	57	子どもからお年寄りまで楽しめる科学館	8	親しみやすい科学館	206	5.3
4.9	54	身近に・近所にある科学館	9	交通の便を改善し、利用しやすい科学館	197	5.0
4.8	52	親しみやすい科学館	10	専門的な科学実験や体験ができる科学館	193	4.9
4.6	50	遊び場のような科学館	11	最新の科学が学べる科学館	185	4.7
4.0	44	専門的な科学実験や体験ができる科学館	12	1日楽しめる科学館	177	4.5
3.8	41	実験や作り出すこと（プロセス）を重視した科学館	13	地元のみんなに愛される科学館	151	3.9
2.9	32	交通の便を改善し、利用しやすい科学館	14	身近に・近所にある科学館	144	3.7
2.9	32	地域の誰もが科学を楽しめる、引き出しがいっぱいある科学館	15	実験や作り出すこと（プロセス）を重視した科学館	141	3.6
2.4	26	地元のみんなに愛される科学館	16	生涯学習施設としての充実	126	3.2
2.2	24	それぞれが自由に楽しめる科学館	17	遊び場のような科学館	125	3.2
2.0	22	地域の資源（自然・文化・ひと等）を生かした運営	18	地域の資源（自然・文化・ひと等）を生かした運営	123	3.1
1.9	21	館内スタッフとの交流を重視した科学館	19	それぞれが自由に楽しめる科学館	92	2.3
1.7	19	生涯学習施設としての充実	20	多くの地域住民が参加し盛り上げていける科学館	75	1.9
1.2	13	多くの地域住民が参加し盛り上げていける科学館	21	館内スタッフとの交流を重視した科学館	67	1.7
100	1,092	計		計	3,921	100

身近で親しみを感じており、家族や友人と遊びながら楽しめる科学館という認識。
最新の科学を学べ、本物と出会える場への要望が高い。

幅広い年齢層が、地域の誰もが楽しめる、親しみやすく利用しやすい科学館を求めている。

■子どものランキング

「親しみやすい」「身近な」「館内スタッフと交流がある」科学館像に関しては、3つの調査とも低い傾向が見られる。第2次基本計画では、これらの方向性についてよく検討し、今後の方針を定めることが必要。

一方、今すでにできており、子どもたちが将来も望んでいることに関しても、どのような方向で事業を成長・展開させていくのか十分に検討することが求められていると言えよう。

調査2	調査3	調査5

これから先、希望する科学館像　児童版　ランキング

ランキング	調査2-館内-個人利用	調査3-館内-学校団体利用	調査5-圏域内
1	遊びながら、楽しく科学が学べる科学館	遊びながら、楽しく科学が学べる科学館	遊びながら、楽しく科学が学べる科学館
2	学校とは違う体験や学習ができる科学館	学校とは違う体験や学習ができる科学館	家族や友人といっしょに楽しめる科学館
3	子どもからお年寄りまで楽しめる科学館	家族や友人といっしょに楽しめる科学館	学校とは違う体験や学習ができる科学館
4	それぞれが自由に楽しめる科学館	最新の科学が学べる科学館	子どもからお年寄りまで楽しめる科学館
5	1日楽しめる科学館	本物（実物など）に出会える科学館	1日楽しめる科学館
6	本物（実物など）に出会える科学館	子どもからお年寄りまで楽しめる科学館	それぞれが自由に楽しめる科学館
7	家族や友人といっしょに楽しめる科学館	いつ行っても楽しめる・感動できる科学館	いつ行っても楽しめる・感動できる科学館
8	最新の科学が学べる科学館	それぞれが自由に楽しめる科学館	本物（実物など）に出会える科学館
9	いつ行っても楽しめる・感動できる科学館	遊び場のような科学館	最新の科学が学べる科学館
10	遊び場のような科学館	1日楽しめる科学館	専門的な科学実験や体験ができる科学館
11	専門的な科学実験や体験ができる科学館	地元のみんなに愛される科学館	親しみやすい科学館
12	地元のみんなに愛される科学館	専門的な科学実験や体験ができる科学館	身近に・近所にある科学館
13	身近に・近所にある科学館	身近に・近所にある科学館	地元のみんなに愛される科学館
14	館内スタッフとの交流を重視した科学館	館内スタッフとの交流を重視した科学館	遊び場のような科学館
15	親しみやすい科学館	親しみやすい科学館	館内スタッフとの交流を重視した科学館

館内利用者の場合、「親しみやすい科学館」が最下位		
全体的に、「スタッフとの交流」、「身近にある」、「地元に愛される」が低め。		
	学校団体は、学習目的が比較的上位にある	本物志向は低め、知られていない可能性あり
「子供からお年寄りまで」は高め		「子供からお年寄りまで」は高め

（5）多摩六都科学館SWOT分析結果

専門部会をワークショップ形式で開催し、基本計画策定委員会委員、組合、科学館の現場スタッフ、ボランティアが一堂に会し、多摩六都科学館の強み・弱み・機会・脅威（SWOT）の分析を行った。分析後、多摩六都科学館のこれからの使命、成長・改善・回避・撤退戦略についてグループ討議を行った。

内部環境分析・内部要因	**強み strengths** ■利用者の満足度が高い（満足61%＋どちらかといえば満足33%＝94%） ■リピーターが多い（大人約6割、児童8割強） ■ボランティア活動が活発 ■世界一のプラネタリウムと生解説 ■体験型展示にリニューアル ■子どもの施設というイメージが定着 ■地域の小学4年生が来館・学習投影 ■雑木林などの緑環境がある ■専門家とのネットワークがある ■指定管理導入による円滑な運営　等	**弱み weaknesses** ■圏域市民でも知らない人が15%、非利用者は44% ■アクセス、交通の便が悪い ■駐車場の不足、駐車料金が高い ■市民の「地元の科学館」認識が低い ■中学・高校生の利用が少ない ■平日と休日の利用者数の差が大きい ■成人向けプログラムが開発不足 ■カフェ・ショップの魅力不足 ■人員不足 ■地域連携活動は始まったばかり ■割引を実施できる財源がない　等
外部環境分析・外部要因	**機会 opportunities** ■高齢化（市民参加による科学館運営の機会増大） ■近隣に競合施設がない ■話題となる天文現象が続いている ■マスコミが当館に注目している ■周辺に研究機関や技術系企業が多い ■大学や企業等が地域連携を推進 ■参加型・体験型の施設が人気 ■ベッドタウンとして人口増加 ■学習指導要領で博物館利用を推奨 ■持続可能なエネルギー社会への転換 ■生物多様性保全戦略 ■2020年オリンピック東京開催　等	**脅威 threats** ■少子化 ■子どもの理科離れ ■地方自治体の財政難 ■消費税アップによって各家庭でレジャー費用削減の可能性 ■緑環境の減少 ■地球温暖化による自然災害の多発 ■巨大地震　等

多摩六都科学館　第2次基本計画
平成26年度～平成35年度（2014年度～2023年度）

■発行日　**平成26年1月**

■発行　**多摩六都科学館組合**
〒188-0014　東京都西東京市芝久保町5-10-64
電話：042-469-6982
ファクシミリ：042-469-7575
URL：http://www.tamarokuto-sc.or.jp

■基本計画策定業務委託機関
有限会社プランニング・ラボ
〒171-0052　東京都豊島区南長崎6-5-17
電話＆ファクシミリ：03-5983-0592